

【研究ノート】

「大正新教育」期の Fröbel 受容

酒 井 玲 子

研究の視点

元来、明治期の Fröbel 受容は幼稚園教育法、なかでも恩物使用法が中心であるとされてきた。だが近年研究が進んで、翻訳されなかった英文書を含めて Fröbel 文献の導入はかなりの数にのぼることが明らかになっている。それによって Fröbel の人物伝から思想、教育論に係わる Fröbel 全体の受容の試みがなされていることも分った。⁽¹⁾

それらは米国経由で導入された英文の文献と翻訳本、または邦文の Fröbel 伝などであるが、邦文の主なもの次は次のようである。J. Payne, 山縣悌三郎訳『フレーベル氏小伝及幼稚園』(1886, 明治. 20), 小西信八『普列伯氏略伝』(1893, 明治26), Fröbel, A.L. Howe 訳『母の遊戯及育児歌』(1897, 明治30), 東基吉『フレーベル氏教育論』(1900, 明治33), 広瀬勘次郎『フレーベル言行録』(1908, 明治41), Fröbel, A.L. Howe 訳『人之教育』(1909, 明治42), など。細かく見ていけば明治の初期にも「教育雑誌」等の訳稿に Fröbel 思想が発表されている。

だが概ね、明治期は Fröbel 思想や教育論全体よりも幼稚園教育法の輸入紹介が主で、恩物教育法がわが国の幼稚園界を風靡していたのも事実である。

それが二十世紀に入るや Ellen Key の『児童の世紀』(1900) が刊行され、児童の自発性、個性を高唱する新教育時代の到来を迎えることになる。これは国際的な民主主義の高揚を背景とした進歩主義的教育運動であるが、わが国でもいわゆる「新教育」、「大正自由教育」、「大正新教育」と呼ばれる教育改革運動となって現われた。

逆のぼると、この新教育の主張はすでに明治後期、日露戦争後から谷

本富や樋口勘次郎らによって始められている。それが沢柳政太郎の小学校教育改善を試案とする実験学校、「成城小学校」(1917, 大正6)に発展し、そして、野口援太郎の「教育の世紀社」の創設(1923, 大正12)と翌年の「児童の村小学校」によって大正新教育は頂点に達した。

「児童の村小学校」では教育方針として生活の尊重、自然に親しみ自然に順う、環境の多様化、個別的、家庭的などをあげ、学級や時間割無し⁽¹⁾の自由教育が実践された。

また「八大教育主張」(1922, 大正11)やこの期の新教育論をみると、米国の進歩主義教育の影響が強い。Dalton Plan, Project method, Montessori methodなどが盛んに導入されている。重要なことはこの期に Rousseau や Pestalozzi, Fröbel などの近代教育を再評価する動きが出てきたことにある。谷本富の『欧州教育の進化』や入沢宗寿、吉田熊次、阿部重孝ら西洋教育史家は発達史的に把える教育史観によって新教育の先駆的役割を担っている。

一方、明治から大正期にかけて児童心理学の研究も進み、この成果が幼児、児童の心身の発達を明らかにした功績も大きい。かくして学際的な研究と実践が、児童心理学者や教育学者と現場の教師たちとが相互交流し、明治期の硬直化した教育法の改善に着手していくのである。

この動きをバックに本稿では、明治期とは異質の Fröbel 受容がこの期に如何に行われたかに焦点をあてつつ、その Fröbel 批判と評価の特質を探りたい。この視点からの研究は未だ着手されていないからである。

他方、本年四月からは、新「幼稚園教育要領」が施行される。この「要領」と倉橋惣三の自由主義、児童中心主義的な保育観とを対比させた論説が昨今出されている。倉橋ら大正期の Fröbel 受容を通じて、今日の幼児保育観の考察にも繋がると思われる。

(一) 児童研究と Fröbel 受容

(1) 米国の Fröbel 研究

上記のように明治初期にはドイツからの直接経由ではなしに、英米で著された Fröbel 文献の翻訳やそれを基底とした Fröbel の教育思想や方法が紹介された。この輸入による、しかも米国経由の Fröbel 受容はそ

の対象を異にしているが、「大正新教育」期にも行われているのである。

米国では1880年頃から「Fröbel 主義正統派」と呼ばれる Susan Breuwerらの幼児教育法への批判が昂まってきたが、20世紀の初頭にはこの論争も決着が付き、改革派が市民権を得ている。この改革的進歩主義をとる児童心理学者や教育学者の先鋒にクラーク大学総長、G.Stanley Hall、シカゴ大学 John Dewey、Francis W.Parker、コロンビア大学の William Kilpatrick などがおり、これに全国教育連盟の Kindergarten 部会の Anna Brayn、Lucy Wheelock、Patty S.Hill など実践家たちが加わって Kindergarten の教育改革を主張していた。

このうちシカゴ教育大学に実験学校を開設した Dewey は、『学校と社会』（1915）において Fröbel の教育原理を論評した。彼は要約すると以下の点については Fröbel に賛意を表している。

- (1) 協同的、相互扶助的の生活の訓練で、子どもたちに協同、相互依存の意識を養成。
- (2) 教育活動の根源は子どもの本能的、衝動的な態度、活動から生ずるという、自発活動の重視。
- (3) 生産と創造的な作業を通して価値ある知識⁽³⁾の獲得。

同時に当時米国の Kindergarten で広範に使用されていた Fröbel 遊具、すなわち Gabe = 恩物の様式が幼児の身体的、情緒的興奮力を減退させ、神経疲労を起すと指摘した。彼は Fröbel の自然、社会、宇宙の認識の手段としての恩物の利用に生理学や心理学の未発達をみている。また、Kindergarten の自由な協同社会と当時のドイツの社会状況との断絶を指摘する。それが Fröbel をして複雑な知識や技巧に凝らせたとする。また Dewey は『民主主義と教育』（1916）において、Fröbel が「子どもたちの生れつきの能力の重要性を認識したこと、それらに愛情をこめて注目したこと、そして他の人々にもそれらの研究の影響を及ぼしたこと⁽⁴⁾」は、近代教育理論において比類のない貢献であると評価している。しかし Fröbel の発達を促進する諸方策の組織化は、発達しつつあることが発達、ということを理解できずに完成された成果に重点をおいたとして、これを斥けた。Dewey は、子ども達の輪が集合の便利性を超えて人類の合一的生命を象徴化する「Fröbel 理論」の抽象哲学を受容せず、実用主義哲学の立場から、興味ある協同活動への参加によって現実社会の歴史

的進歩に貢献する教育プログラムを提唱した。

Kilpatlic の“Froebel’s Kindergarten Principles” (1916) は、「批判的試み」とあるように、Fröbel 教義の基礎原理、その教育哲学、Kindergarten の恩物とその位置、Kindergarten のカリキュラムについて徹底的な分析を試みた。彼も Dewey 同様に Fröbel の発達観に、プレフォーム (Preform, 前成) されている心身の状態をみている。それ故に Fröbel は人間の前成の活動源を呼び覚ます手段として、宇宙全体を象徴した球 (ball) を導入したという。彼はこうした発達観自体を問題にする。つまり、論理から演繹した象徴による遊具は、実際の子どもたちには適合しないというのだ。結局この手段からの解放が、子どもたちをより豊かに生活させであろう、と峻烈な批判を展開したのである。

一方、Dewey らと米国進歩主義教育を推進した Francis Wayland Parker は、自説の中心統合法の学理 (The doctrine Concentration) の思想基盤に Herbart の教授法や Fröbel の身体、知力、魂の調和的発達観を受容している。彼は Fröbel のうちに、「不滅の源泉、そこから胚種のように、中心統合法の諸原理が発展してきた基本的な教理⁽⁶⁾」をみ、「人間の精神の統一、創造物と造物主との統一についての崇高な観念、すなわち、すべての生命がひとつの生命のためにあり、ひとつのものがすべてのもののためにあるという観念⁽⁷⁾」を得た。こうして Parker は米国の民主主義的公教育制度の樹立にあたって Fröbel らからその共同と統一の教育観を学んでいる。

(2) 「日本児童学会」の Fröbel 受容

これら米国児童研究の影響下にわが国では、1890 (明治23) 年、哲学と心理学系の研究者が「日本教育研究会」を組織した。ここでは、Herbard 学派の影響を受けつつ、元良勇次郎、高島平三郎が『児童学綱要』(明治23) を発刊している。また松本孝次郎の『児童心理学講義』(同31)、桑野礼治『ヘルウェヒ児童心理学』(同32)、黒田定治『レサー氏児童心理学』(同33)、松本孝次郎『バルドキン精神発達之説明』(同34) なども著されている。また W.T. Preyer や D. Tiedemann の発達心理学の著書類の翻訳紹介も盛んに行われた。

この研究会では Hall の質問紙法などの研究も手がけられ、松本孝次

郎は会誌『児童研究』（第七号，明治38）に，「児童研究史に於けるスタンレー・ホール氏の位置」を紹介している。彼は Hall の発生心理学の方法や質問紙法による児童の恐怖，人形遊びの解釈，嫉妬，疑惑などの分析，聴視覚など児童心理実験の功績を紹介している。

上記「日本教育研究会」は，1902（明治35）年には「日本児童研究会」に，さらに1912（明治45）年には「日本児童学会」へと改称した。会には教育学や西洋教育史学の入沢宗寿，乙竹岩造，吉田熊次，谷本富など、当代きっての新教育学の先鋒をいく碩学が名を連ねており，その他，児童心理学，教育病理学，学校衛生学，小児科学，特殊教育学，児童文学など幅広い関連領域の研究者が所属していた。

1898（明治31）年，会誌『児童研究』の発刊に際して，当時の会長元良勇次郎は，明治以来の西洋思想の輸入をへて，今や「自国の児童に就きて実際の経験観察を重ね之を欧米のものと比較して其異同を明らかにして国家教育を置くべき確実なる根拠⁽⁸⁾」を得んために，本誌が教育学術に従事するよう、その主旨を述べている。また元良はこのなかで，医学，生物学，生理学，解剖学，心理学を経て今や児童心理学や児童学の名称下に「児童の心身全体に関する研究を創むるに至れり⁽⁹⁾」とも宣言している。

一方，この児童学会のメンバーがフレーベル会（1918，大正7年に日本幼稚園協会に改称⁽¹⁰⁾）の役員を兼ねたり，相互に夫々の研究誌に翻訳紹介や論文を発表していた。

「日本児童研究会」主幹の高島平三郎は，『児童研究』（第14巻第4号）に「幼稚園教育」や「フレーベル略伝」を記し，併せてわが国の幼稚園界の問題も指摘した。この高島は元来，Hall の研究者であるため，Hall を通しての Fröbel 観を我国に紹介した。それが『児童研究』（第18巻，12号，13号）の「フレーベル氏の九原則を評す⁽¹¹⁾」である。これは“Educational Problems”（1911）などにある Hall の Fröbel 観の焼き直しで，Fröbel 教育論のうちの評価するものを9項目にわたってとり上げている。この「九原則」については倉橋惣三，森川正雄，谷本富なども紹介しているところをみると，Hall の Fröbel 観がいかにわが国に強い影響力を与えたかが窺える⁽¹²⁾。

ここでは Hall—高島線上の Fröbel をみてみたい⁽¹³⁾。

1. 児童ハ人類種族ノ発達史ヲ反復ス

Hall は Fröbel がいわゆる約説の原理 (Theory of Recapitulation) に通ずる発達観に立っており、これは現代の発生心理学 (Genetic psychology) の主眼にあるという。高島はこの Hall の Fröbel 観を引き継いで以下のように解説する。個体発生と系統発生説の創唱者 Ernst Heckel らの業績により、児童心理学が発達した。児童半開人説もこれによる。Fröbel はこの Hackel よりも百年も前にこの発見に達している、と。

さてこの Hall や高島らが賞賛する Fröbel の「約説原理」なるものは、Fröbel 文献の引用がないので定かではないが、恐らく「Menschen-erziehung」(1826) の次の部分などを指していると考えられる。

「たしかに、それぞれの次の人類及びそれぞれの次代の個人は、人類以前の発達形式をすべて自己のうちに経過しなければならぬし、また実際に経過しているものである、一さもないとそれぞれの次代の個人は、前代の世界も現代の世界も理解できないであろう⁽¹⁴⁾」

Fröbel がこのように人類の発達形成史を個人のうちにみる時、それはむしろ次の論を導くための前提と考えた方が良い。「しかしそれは模倣、模造、模写の死んだ道においてではなく、自己活動的、自発的発達形成の生きた道⁽¹³⁾」(「auf dem lebendigen Wege der selbst-und freitätigen Entwicklung und Ausbildung⁽¹⁵⁾」) において実現されなければならない。しかも Fröbel にとっては、「人間性を固定化した、完結した、さながらただ新たに、かつただより大きな一般性においてくりかえされるものとしてみる前者の発達観及形成観は、言語に絶した有害な見解⁽¹⁶⁾」なのである。

また人類の発達史を認め、必然性、規制、強制が教育上に含むとしても、それと切り離して自由に、全面的にその法則性が使用されるべきであるという。ここにこそ Fröbel の発達観をみるべきであろう。

2. 感情及ビ本能ハ智力及ビ意志ノ萌芽ナリ

3. 自己活動自発活動及ビ遊戯ハ創造性ヲ有ス

これらは 1 の「原則」にも通じている。高島は、「干渉せず、出来るだけ自然に任せてそれぞれの心の作用を充分に発育するよう努め⁽¹⁷⁾」ることと、自己創造力こそ Fröbel 精神であるとする。だが、この点わが国では Fröbel 主義に反して子どもの創造力を圧迫していると警告を促す。

4. 高尚ナル一元的基督教的万有神教ハ真正ノ教育哲学ナリ

たしかに万有在神論は Fröbel 哲学の根幹にある。高島は、明治以来、わが国の教育が宗教を排斥した結果、物質主義を招いたことを指摘し、宗教は信ぜずとも少くとも人類以上の力を信じて敬虔の心を養うようにと説いている。

5. 児童ハ本来肉体強健ニシテ生レナガラ罪障アルモノニアラズ

Hall はここの説明で、人間の本性を悪とみるカルヴァニズムと違って Fröbel は、人間性は健全と善良と備えていたとする。この部分は「Menschenerziehung」の「神的なものの作用はかき乱されない状態においては必然的に善であり、善でなければならず、善以外のものでは全くありえない⁽¹⁸⁾」や「なるほど人間の本質自体は善であり、人間自体には善なる志向⁽¹⁹⁾が存在する⁽²⁰⁾」、「生れつきの有害な性質などというものは存在しない」などから引用したものであろう。

ここでは第一に Fröbel が人間性に含まれる神性が ungestörtheit = かき乱されない、状態のもとでは最善に作用すると述べている点が重要である。これは Rousseau の「造物主の手を離れると全て悪になる」という思想にも通じている。それ故、人的、物的に優れた環境での最善の教育が志向されなければならない。

第二に Fröbel 自身は悪を「罪障」と同義語に用いているわけではない。そもそもキリスト教でいう罪とは現実の人間存在の状況、すなわち神からの離反を意味し、法的な、道徳的な欠点や悪を意味しない。Fröbel は、ここで単に「地上的現象⁽²¹⁾」としての人間にまつわりつく嘘偽、悪習や弱点、欠点や悪そのものを問題にしているのである。だからこそ、「したがって、あらゆる欠点、いな悪を破壊し、放棄させる唯一の、しかも決して欺くことのない手段は、欠点が押し潰しとか、攪乱とか、誤導とかから起ってきた人間の本質のもとと善なる源泉、測面を探し求め、発見し、そしてそれを養い、育て、起し、正しく導くように自ら努力⁽²²⁾することを本質とするものである。こうして欠点は結局消滅するであろう」と説くのである。

上記の Fröbel の言葉をカルヴァニズムに係わらせる Hall や高島らの理解は当を得ていない。むしろそれは教育論の範疇に属すると考えられる。

だが高島は、つづけて「基督教で説く如く人は生れながらにして原罪 Originalsin⁽²³⁾ があって穢れて居る者であるといふ事も信じられ⁽²³⁾ないという自論を説く。それは「罪なきもの」=善という公式での自らのキリスト教と Fröbel 論を作り上げているためである。

6. 児童ヲシテソノ発達ノ各段階ニ於ケル要求ヲ満足セシムベシ

これは先の Fröbel の著に「それぞれ次の段階の努力にしてかつ十分な発達形成は、すべてのかつそれぞれ個々の先行する生命の段階の強力にして十分な、かつ固有な発達にもとづくものである…」などを根拠にしてのことであろう。Hall は Fröbel が早熟な発達を強制せず、青年は少年を、少年は幼年を嘲笑してはならぬと述べていることを重視している。またこれを受けて高島は、「一人の生涯は種々の特別の生活が重なり合⁽²⁵⁾って出来ている」と、発達の重層構造を説いている。

7. 常に和合ト愛情トヲ以テ規則トスベシ

Hall はこれを“harmony and love”と表現し、Fröbel 教育論の真髓とみている。

8. 人ハソノ児童ノ為メニ生存セザル可ラズ。児童以外ニハ人ノ生存ヲシテ価値アラシムルモハーモナシ

これは Fröbel の標語ともなった次の言葉を集約したものと考えられる。「子どもから学ぼう。子どもの生命のひそやかな忠告に、子どもの心のしずかな要求に、耳をかたむけよう。子どもに生きよう。そうすれば子どもの生命がわれわれに平和と喜びをもたらし⁽²⁶⁾てくれるであろう」とか、「子どもたちに生きよう」(Kommt laßt uns unseren Kindern leben!), にそれは表現されている。

9. 児童ノ最大要求ハ健康ト戶外生活(自然及ヒ土地ニ親ムタメニ)トノニナリ

Fröbel は子どもを植物に喩えて、戸外で生活する必然性を導き出した。健康は全ての基礎、試金石である。高島はこれにふれてわが国の幼稚園事情とを対比させている。「室内の課業を少くして庭園、森林海岸、野原など危険でなくして自然物に親しみ得る場所⁽²⁷⁾」で生活させることが大事である。「狭い室に多くの子供を入れて自由に運動も許さず悪い空気をさんざん吸はせてこの中で何か教へやうとするような幼稚園⁽²⁸⁾」を批難する。

以上、高島は Hall による Fröbel の九原則をそのまま受容し、その

Fröbel 観に立つてわが国の幼稚園の状況を述べている。ただ Fröbel が Hall の視点からのみ扱われているので、Fröbel 理解もおのずと限定されている。例えば Fröbel 教育論の根幹とも言うべき共同感情 (Gemeingefühl) の教育などはとり上げられていない。

Fröbel にとっては、「この共同感情は、あらゆる真の宗教心の、永遠との、神との妨害なき合一へのあらゆる真の努力の最初の芽ばえであり、最初の発端⁽²⁹⁾」であり、Kindergarten の思想的根拠としているものである。

また労働教育論も脱けている。Fröbel は、遊戯や積木の組み立て作業を将来の生産活動の受精期とみている。また「いかなる身分、地位の者であろうとも、毎日少くとも一時間ないし二時間、特定の外的な製作品の生産のための真剣⁽³⁰⁾な活動に献身しなかった幼児更に少年や青年は存在すべきではなかろう」とさえ述べている。

高島はこの Fröbel 九原則を結論づけて言う。「今日の心理学、教育学の進歩に Fröbel の神秘的形而上学的方法が合わぬとしても、その原理、原則は依然として生命を有している。その原則を時代々々に応じて適当に⁽³¹⁾応用して往きその効果の大きに挙がるやうに努むる責任がある」と。

だが高島が効果の挙がらぬものとして捨象する「神秘的形而上学」のうち、Fröbel 教育論の中核があるのも事実である。不透明で渋解な観念的色彩を帯びながらも、その雲の切れ間にドイツの国家的統一と解放、平和の悲願が確かに表され映し出されている。

Keilhau 教育や Kindergarten の設立とその存続の苦闘は彼の統一、合一、和合、一致などの教育思想の結実である。彼の球体法則やそれを支えるドイツロマン主義思想の研究は、有用なものを適当に利用するためというよりは、Fröbel 思想全体を、しかも時代との係りで理解するためにある。

ともあれ次節の倉橋惣三は概ね、この Hall—高島の線上にあって、Fröbel 批判と受容をより具体的に、実践的に試みている。

(二) 倉橋惣三の役割

(1) Fröbel 批判と「新釈」

下記の一覧は大正、昭和前期に倉橋惣三が『幼児の教育』(1919, 大正8年に『婦人の子ども』から改称)誌に掲載したFröbel関係の論文や翻訳である。

1912	明45	幼稚園の改良(スタンレー・ホール氏)	11	8,10,11
		森の幼稚園	12	1,2,3,5,6
		幼稚園の教育(スタンレー・ホール氏)		4
		フレーベルと婦人		5
		フレーベル主義新釈		6
1913	大2	教へない教育	13	1
		フレーベル伝雑感		4
		「恩物」に就て		7
		子供から学べよ		11
1914	大3	フレーベル自伝	14	1~12
1915	大4	ビューロー夫人のフレーベル追悼録(訳)		1~12
1916	大5	同上	16	1~3
		ブロー女史を憶うにつけて		
		ペスタロッチとフレーベルの弱点(ハイワート氏)児童の個人性(ハイワート氏「ペスタロッチ及フレーベルの教育観」より)		7
		フレーベルの思想—フレッチャーに拠る		8
		フレーベルの思想		9
				10,11,12
1917	大6	幼稚園教育の積極性	17	1
1919	大8	キンダーガルテンという名は改むべきか	19	5
1922	大11	フレーベル巡礼	22	2
1926	大15	フレーベルの日に—フレーベル巡礼の思い出を辿りて	26	5
		—		
1929	昭4	ハウ女史	29	11
1930	昭5	後藤真造氏著「フレーベル研究」	30	9
1932	昭7	巻頭言—キンダーガルテン	32	4
		フレーベル誕生百五十年		
		フレーベルの生まれた家—フレーベル誕生百五十年記念講演		5

上記のほか倉橋のFröbel関係の著作としては、1932(昭和7)年以降の『幼児の教育』、『児童研究』、『教育科学』誌に掲載した論文のほか、単著としては、『幼稚園雑草』(1926,大正15)『幼児の心理と保育』(1928昭和3)『児童保護の教育原理』(1929,昭和4)『幼稚園保育法真諦』

(1934,昭和9)『日本幼稚園史』(1934,昭和9),『フレーベル』(1939,昭和14),『子供讃歌』(1954,昭和29)などがある。

倉橋のFröbel研究を相対的に時期区分してみると、その第一期は、明治後期から大正中期で、米国経由での文献の翻訳、紹介が中心である。倉橋は1910(明治43)年に東京女子師範学校講師に着任する⁽³²⁾や、日本の幼稚園史やFröbel研究に着手した。まずZimmerman編のLeipzig版によるFröbelの主著“Menschenerziehung”と“Mutter und Kose-Lieder”を読み、そこからFröbel思想の基底にあるSchellingの自然哲学やOkenの生物科学を読みとっている。だが上記二冊以外、ドイツ語文献によるFröbel研究はこの期には無い。それは当時「日本児童学会」の会員として、倉橋もクラーク大学やシカゴ大学の進歩主義教育論に解発されており、彼の目が米国に集中していたことにもよる。それが、この期には「クラーク大学の児童研究事業」⁽³³⁾以下、発達、遊戯、遊具、文化材に関する米国の研究成果の翻訳に費いやされるわけである。

Fröbel研究については「日本児童学会」の研究者らがそうであったように倉橋も、米国の児童研究を移入する過程で必然的にStanley Hallに注目するに至る。松本孝次郎や高島平三郎については前述のとおりである。倉橋がHall関係の文献、“Some Defects of the Kindergarten in America”(1900)や“Educational Problems”(1911)を翻訳して紹介したのは貴重な功績といえよう。

倉橋訳の「幼稚園の改良(スタンレー・ホール氏)」においてHallのFröbelに関する意見は、主に発達観の欠陥についてである。彼は、Fröbelが純粹に遊戯衝動を教育として組織し、訓練したことには評価をあたえつつも、他方児童を大人の小型と見ていたとして批判する。Hallは将来の発達の縮少形が児童の本性に内在する、といういわばOkenらのプレフォーメン説イコールFröbelの児童観とみなす。またHallは次のようにいう。その大人の小型としての児童観を基にして、自然を象徴化した遊具の整然たる秩序で排列したため、Fröbelは形式主義に陥った。だがその後生理学、発達心理学の進歩は児童の興味と才能を自由に働かせることを主張した。そしてこれら近代科学の成果に立って幼稚園教育の改良を進めることこそがFröbelの根本精神に忠実である、と結論づけている。

このような Hall の Fröbel 観は倉橋に鮮明な印象を与えた。この期倉橋は、エミリー・ミカエリスの英文から一年に渡って、「フレーベル自伝」と「ビューロー夫人のフレーベル追悼録」を翻訳紹介している。「自伝」は現在では Wichard Lange 編の「Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften」(1951)に収められているのだが、当時は極めて入手困難で、原著の翻訳は長田新訳(1938, 昭和12)を待たなければならなかったのだから大変な業績である。また、Marenholz-Bülow の「Erinnerung an Friedrich Fröbel」(1876)は実に1972(昭和47)年になって伊藤忠好訳の『回想のフレーベル』の名で出版されたのである。以上にみるように、倉橋の Fröbel 受容の第一期の特徴はアメリカ児童教育学者の業績や英文の Fröbel 文献の導入である。

第二期の特徴は倉橋自身の Fröbel 論の展開である。なかでも「フレーベル主義新釈」は Fröbel 時代と今日との間に心理学の発達差をみ、Fröbel の限界とともにその根本精神の新しさに着眼している。彼はまず子どもの認識は象徴的論理的解釈の順序と異り、実物や具体から入る。然るに恩物という、最初から抽象的論理をもつ遊具で宇宙観を教えようとは、児童心理の原則にかなっていない。例えば「Mutter und Kose-Lieder」の象徴的遊戯法によれば、自然、家庭、社会、国家等の抽象的観念を含み、児童の内的生活の象徴化である。しかも象徴を通して知識を与えようと考えた点では、恩物教育法と同じ誤りである。

象徴主義への批判と Fröbel 本来の教育原理の確認＝自己活動尊重への立ち返り、即ち象徴主義と形式主義を脱皮することで Fröbel へ責務を果すことが「新釈」される。これら倉橋の論は、Fröbel 教育原理の誤謬の指摘とその真価への回帰という点ではアメリカ児童教育学者達の研究成果の線上にあり、その咀嚼に過ぎない。だが、「恩物に就て」にみられるように、これを Fröbel の「象徴癖」の産物と決めつけ、従来の使用方法にこだわらず、「用法の面白い玩具、として幼児に自由に持ち遊ばしむること」⁽³⁴⁾、しかも「恩物」という名称を使用しないことへの訴へかけは、当時の幼児教育現場への衝撃ですらあった。

一方、『実験保育学』の著者である和田実なども、Rousseau, Pestalozzi, Kant, Fröbel などの近代教育思想を踏えながら、極めて現実的実践分析の手法で新しい保育学の理論を構築した。これは訓育的誘

導や直観遊戯論の導入など、当代の到達した保育理論の集大成の観がする。かくして、倉橋たちは当時の幼児教育界の改善に多大な役割を果たした。なかでも「幼児保育の新目標」、「新たに考へよ」、「幼稚園界の二大急務」、「教へない保育」、「子どもから学べよ」などの倉橋論文は、幼児教育界への啓蒙活動の役割を担ったともいえる。

倉橋による第三期のFröbel受容は、1921（大正10）年にFröbelの生地ドイツを巡礼したことに始まる。これは倉橋のうちにFröbel再考の強烈な印象を刻みつけた。この際、「Menschenerziehung」、「Mutter und Kose-Lieder」の初版本も入手している。「我観フレーベル」と銘打つ著作の『フレーベル』（1939、昭和14）には倉橋のFröbel観が集約されている。この期に彼がFröbelを再評価しているのは生活教育論である。「われわれは子どもと共に生活し、また子どもをしてわれわれと共に生活せしめねばならぬ」というFröbelの主張への共感であり、それをFröbelの教育実態として把える。

元来生活教育の主張は大正新教育運動の中心にあり、これがFröbelの地への見聞と合流して、倉橋の「生活を生活で生活へ」などにみられる生活の自己発展論に深く影響を与えたと推察される。

Fröbelの教育方法とはそもそも、「生活から引き出され、人為的に工夫せられた教育技巧的なものではなく、どこまでも生活そのものによろうとして⁽³⁵⁾いるか」である、と倉橋は強調する。それ故に彼はKindergarten＝子どもたちの園の語に「他の一切の誤謬を覆う程に幼児教育精神の生き⁽³⁶⁾生きしさ」を見る。しかも彼は、Fröbelの⁽³⁷⁾生活的把握は、「現代の最も進歩せる生活主義教育思想に劣らざるもの」があるという。遊戯、勤労を真に生活教育として尊重したFröbelの再考が必要である強調する。

かくして倉橋のFröbel人間教育観は、自然と生活の現実を通して生きる人間に到達した。それは、「自分のフレーベル観は神性的児童観から⁽³⁸⁾出発したが実生活の現実観に終らせた」という述懐に窺えるものである。

(2) 「幼稚園令」の保育観

倉橋がFröbel理論の真髄として感得した生活教育論は彼が幼稚園と家庭の関係を論ずる時に際立っている。1914（大正3）年の『婦人と子ども』誌にはその両者について、「家庭は家庭としてその充分の教育力を

発揮し居る上に尚ほ幼稚園の協力を得ようといふうにある⁽³⁹⁾」と述べて、それぞれ独自の役割と相互協力事業的性格を打ち出していた。また、「対人の道德感情の萌芽⁽⁴⁰⁾」を助け、共同生活の要求を充たし、あるいは Fröbel 以来「その子どもの自分の持っている力で最も幸せに都合よく伸びていく場所⁽⁴¹⁾」として、「幼稚園は幼稚園」の役割を唱えた。保育活動でも「同等協力」の友人相互交流の経験が重視されていた。

だがその相互交流も倉橋にあっては、個人の自発性や自己活動の手段とされ、交りの積極的意義や活動内容、方法の欠落というのが特徴でもあった。やがて1919(大正8)年、彼は、「幼稚園は家庭の奥座敷、特別に幼稚園という機関があるわけではない⁽⁴²⁾」と断定するに至っている。この考え方は一般に大正新教育運動のリーダーたちにも共通していた。「八大教育主張」者の一人、河野清丸は『モンテッソーリの教育』の紹介でこれまでの幼児教育法に新風を送り込んでいたが、彼も、「要するに幼稚園は家庭の延長であって、家庭に於ける長所を十分発揮すると同時にその短所を補う⁽⁴³⁾」ことにある、と主張したのである。

だが例外的に実践現場の山辺知之城東幼稚園々長などは、幼稚園は家庭の育児法と異なるので、家庭の補助機関ではないと主張した。彼は「普通の家庭では困難な幼児の完全教育に欠くことのできない特殊な教育⁽⁴⁴⁾」に幼稚園を位置づけた。だがこれはこの期には少数意見の域を出ていない。大勢は、「幼児教育の本義、方法の原則からあらゆる条件をさながらに見えているのは家庭⁽⁴⁵⁾」で、これを補う存在としての幼稚園論に唱和していったのである。

さて倉橋の場合、この家庭教育への傾斜が Fröbel 受容と密接に関わっていることは見のがせない。倉橋は前述のように Fröbel 教育論の中核に生活教育をみている。それを進めていくとゴールには「さながらの生活」の場、つまり家庭にいきついたわけである。そしてついに倉橋には „Menschenerziehung” でさえも家庭教育論と見えてしまう。だがこの著の副題には、「カイルハウでの一般ドイツ教育舎において努力された教育=授業と教授法」と記されているように、基本的には学校教育に裏打ちされた理論であることは言うまでもない。

倉橋のいう生活教育論は、『系統的保育案の実際』(1935,昭和10年)等に具体化された。それは自由遊戯と生活活動を誘導することで総合的、

包括的な生活の実現を計ろうとする。だが、内容は極めて非「系統的」な家庭教育の延長上でのカリキュラム案になってしまった。これはFröbelの理論というより、米国のコンダクトカリキュラムの影響が色濃く反映されている。

とまれ、この「家庭を補う」幼稚園論を含んで、1926（大正15）年、念願の「幼稚園令」が制定された。沢柳政太郎や野口援太郎など大正新教育の唱導者たちの功績もあって倉橋らの運動は結実したのである。時あたかもFröbelの生誕日にあたり、「我が国民教育の一貫せる完成に向けて学令前の一系列が確立⁽⁴⁶⁾」されたわけで、倉橋らが快哉を叫んだのも当然であろう。確かに彼の意図したものが以下のように成文化されている。

その第一条には、「幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ其心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス」と定められている。倉橋はこれの「読み方」について、第一条「心身ヲ健全ニ発達セシメ」るとは個々の幼児について言い、「家庭教育ヲ補フ⁽⁴⁷⁾」とは、国家社会全体の機能として家庭生活を徹底することを意味しているという。倉橋は戦時期にかけて家族教育振興運動の推進者でもあったから、上記のことと併せて、倉橋の教育観が「体制的イデオロギーである家族国家観と異質な⁽⁴⁸⁾ものではなかった」とみる向きさえある。だが、ここでの「家庭教育を補フ」はむしろ社会福祉的な意味合いが強い。

というのは、倉橋は「新幼稚園令」は「本来の教育的機能を主とするは勿論であるが、其の機能を社会的に拡張して、所謂社会事業としての幼児保護の範囲に進み⁽⁴⁹⁾」入ったものとして評価しているからである。事実、同時に公布された「訓令第9号」には、「父母共ニ労働ニ従事シ子女ニ対シテ」はこの家庭のために「保育時官ノ如キハ早期ヨリ夕刻ニ及フモ亦可ナリ」とされている。その上特別の事情によっては三才未満児の入園も認めていることにもあらわれている。

この年、幼稚園令発布記念全国幼稚園大会が開かれたが、その際の「声明書」には、倉橋らの幼児保育観が明解に表わされている。それは、「近来幼児教育の発達と児童保護の実相に鑑みて吾人は到底現状に満足する事が出来ない。抑も幼稚園教育の本義たる幼児の生活を尊重し其の伸展充実を期するの要は今や世界的の声であって—（略）幼稚園はただに上流社会の専有物ではなく一般の社会生活上必須なる位置を占めつつある

のである⁽⁵⁰⁾」と述べて、その時宜に適した制定に賛辞を送っている。

生活教育と児童保護を柱とし、これまでの保育項目を拡大したこの「幼稚園令」は大正新教育期の保育観を反映したものである。「家庭教育ヲ補フ」ものと幼稚園を位置づけたことは、かえって幼稚園の集団保育に未だ疑念を抱いていた当時の国民一般大衆の不安をとり除く役割を果たしたというパラドックスにこそ目を向ける必要がある。

その立役者である倉橋が、児童保護の観点から幼稚園を把えることが出来たのは、二葉幼稚園の野口幽香たちからの感化が大きい。倉橋は、野口たちの「道端の子供を集めて、フレーベルの理想通りやってみよう⁽⁵¹⁾」というキリスト教的情熱から開いたこの貧民幼稚園と長く交流してきた。また、ドイツの「ペスタロッチ・フレーベルハウス」が幼児保護機能と教育機能を併せもつ教育実態をも視察していることにも因る。

だが倉橋の願望にもかかわらず、この「幼稚園令」の児童保護の精神は財政的裏付けを真剣に具体化する施策にも欠けていたため、現実化し得なかった。それには和田実のような保育学者さえも、「幼稚園の本旨は純粋に幼児教育其者であって救貧⁽⁵²⁾ではない」などと言明していた背景もあるだろう。

一方、幼稚園の動きとは別に託児所令制定の動きも次第に活発になっていく。

終りに

1930(昭和5)年、「大正新教育」期の改革運動を担ったリーダーらが発起人となって、「新教育協会」が設立された。だがその創立趣意書に表した意気込みにもかかわらず、やがてこれはファシズム教育に結びついていった。なぜその進歩的でデモクラテックな教育論が変質していったのか。そもそもその体質にその理由が内含されていたのではないか。

大正自由教育の分析にあたっては、帝国主義段階に踏み込んだ日本資本主義の要請した教育で、真の民主主義ではなかったとする論さえある。⁽⁵³⁾

だがその教育論上の理由には、生活、環境、教育の形態は問われ、改善されるが目的、内容、指導方法は故意に軽視される、ということと係っているといえよう。

とすれば倉橋においてもこのことが言える。彼は Kindergarten の庭に自由に伸びゆく子どもと園丁としての指導者の役割を理想化した。その一方で、「生命合一の思想」など Fröbel の根幹をなすものには、論理偏重としてこれを排斥した。彼が一点「さながらの生活」に Fröbel の真価を見い出したのは良いが、その生活の目的を問わない点では、Fröbel からの逸脱とさえいえる。

この流れにあつて、「児童から」のこの新教育を一定評価しつつも、「子どもははたして草花のように運命づけられた遺伝的存在」⁽⁵⁴⁾か、と倉橋らの児童中心主義に一石を投じたのは城戸幡太郎である。城戸は Fröbel については、「ただ人間の内に神の顕現を見るのではなく、社会の内に人間の形成を見ることによってフレーベルの教育は現代にも生きてくる」⁽⁵⁵⁾と再評価を与えた。彼は子どもから求められるものと教師が子どもに求めるものの両者を整合し、「社会協力」による「民生の慶福」の実現を教育の理想としたのである。

城戸理論には、自由主義と児童中心主義の新教育に欠落していた歴史的社会的役割の重視がある。具体策として、幼稚園と保育所の一元化、幼児教育の義務化、幼児の集団保育における可能性と必要性が積極的に唱えられる。城戸は倉橋が「幼稚園令」に望んだが果しえなかった教育と保護の思想を受け継いだともいえる。

ともあれ、明治、大正、昭和の時代的変遷を通して幼児保育法の近代化と幼稚園の普及に務めた倉橋の功績は卓越している。そして実践的視点による「大正新教育」期随一の Fröbel 研究者であったことも事実である。なお、Fröbel 教育学の全体像の研究は、莊司雅子『フレーベルの教育学』(1944)の出版やドイツ語文献の研究など、もう暫くの時代を経なければならぬ。倉橋文献以外で大正期の Fröbel 関係の著作の主なものをあげておく。

ブレーク、岩村清四郎訳『フレーベル伝』、(1918)長田新訳『児童神性論』(1924) (これは Fröbel の „Menschenziehung” の一部を翻訳したもの)、Fröbel、田制佐重訳『人間の教育』(1925)

〔注〕

- (1) 浦田まり子「明治期の幼稚園教育におけるフレーベル思想の受容」

- (東京女子大学「論集」第27巻(1号)1976), 矢戸健夫「明治初期における外国からの幼児保育思想の導入についての一考察」『愛知県立大学文学部論集』第33号昭和58年), 湯川嘉津美「明治初期におけるフレーベル主義教育の受容」(『幼児教育研究1987年版』), 清原みさ子「我が国幼稚園における手技の歴史—その1—」(愛知県立大学『大学「児童教育学科論集第22号」1989)など。
- (2) 『季刊保育問題研究』119号(1989)で阿部富士男は、「新幼稚園教育要領」とのかかわりで、「倉橋惣三に学ぶ—教育課程編成の主体は誰か」という論文を書いている。
 - (3) デューイ, 宮原誠一訳『学校と社会』(1962) P119~120
 - (4) 同上, 松野安男訳『民主主義と教育』(上) (1975) P99
 - (5) W.H.Kilpatrick, Froebel's Kindergarten principles (1916) P195~P208
 - (6) パーカー, 西村誠・清水貞夫訳『中心統合法の理論』(1976) P13
 - (7) 同上
 - (8) 元良勇次郎「発刊の辞」『児童研究』第1巻第1号(1898)
 - (9) 同上
 - (10) この会の雑誌『婦人と子ども』は1900(明治33)年に創刊したが, 1917(大正6)年には『幼児の教育』と改称した。1979年には復刻版が発刊されたが, ここでは一律この名称にした。
 - (11) これは『婦人と子ども』第15巻第9号と12号(1915, 大正4)に転載されている。
 - (12) 倉橋惣三「幼稚園の教育」『復刻幼児の教育』第12巻(1912), 谷本富「幼稚園教育学講義」『復刻幼児の教育』第19巻(1919) 森川正雄「幼稚園の理論及実際」(1924)
 - (13) S.Hall, Educational Problems (1911) と論文 Some defects of the Kindergarten in Amerika "Form," (1900) を参考
 - (14) Fröbel, 岩崎次男訳『人間の教育』I P23
 - (15) Erika Hoffmann 編, Fröbel Ausgewählte Schriften, Menschenerziehung (1951) S.18
 - (16) Fröbel, 岩崎次男訳 前掲書 P23
 - (17) 高島平三郎「フレーベル氏の九原則を評す」『婦人と子ども』第15巻第九号(1915, 大正4)『復刻幼児の教育』所収 P400
 - (18) Fröbel, 岩崎次男訳 前掲書 P14
 - (19) 同上 P109

- (20) 同上 P 109
- (21) 同上 P 110
- (22) 同上 P 111
- (23) 高島平三郎, 前掲書 P 404
- (24) Fröbel, 岩崎次男訳 前掲書 P 34
- (25) 高島平三郎, 前掲書 P 519
- (26) Fröbel, 岩崎次男訳 前掲書 P 84
- (27) 高島平三郎, 前掲書 P 526
- (28) 同上
- (29) Fröbel, 岩崎次男訳 前掲書 P 30
- (30) 同上 P 39
- (31) 高島平三郎 前掲書 P 527
- (32) 倉橋は東京女子師範学校に赴任の翌年, 1911 (明治44) 年から『婦人と子ども』誌の編集主幹となっている。
- (33) 倉橋惣三, 『婦人と子ども』第11巻第13号『復刻幼児の教育』P 37
- (34) 倉橋惣三, 『幼稚園雑草』(1926) P 229 『婦人と子ども』の論文の中から幼稚園関係の論文をこの書に編集している。
- (35) 倉橋惣三, 『フレーベル』『倉橋惣三選集』第一巻 (1965) P 352
- (36) 同上 P 369
- (37) 同上 P 352
- (38) 同上 P 355
- (39) 倉橋惣三, 『幼稚園雑草』P 193
- (40) 倉橋惣三, 『保育入門』『復刻幼児の教育』第14巻 P 8
- (41) 倉橋惣三, 『幼稚園雑草』P 140
- (42) 倉橋惣三, 『新入園児の家庭の方々へ』『復刻幼児の教育』第19巻 P 145
- (43) 河野清丸, 『小学校から幼稚園への希望』『復刻幼児の教育』第16巻 P 54
- (44) 山辺知之, 『幼稚園出身の成績』『復刻幼児の教育』第16巻 P 426
- (45) 倉橋惣三, 『幼児の心理と保育』『大正・昭和保育文献集』(1978) 第8巻 P 97
- (46) 倉橋惣三, 『幼稚園令の公布』『復刻幼児の教育』第26号 P 2
- (47) 倉橋惣三, 『幼稚園令の読み方』同上 P 58
- (48) 穴戸健夫『日本幼児保育研究の視点』『愛知県立大学十周年記念論集』P 412

- (49) 倉橋惣三、『児童保護の教育原理』(1929)『大正・昭和保育文献集』
第8巻 P29
- (50) 倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』 P445
- (51) 一番ヶ瀬康子・小川信子・泉順・宍戸健夫『日本の保育』(1962) P25
- (52) 和田実『実験保育学』(1932) P133
- (53) 中野光『大正自由教育の研究』(1968) P13 なお玉城肇は『日本教育発達史』(1956)で、自由教育には国家主義的要素がふくまれていたと指摘する。(P143)
- (54) 城戸幡太郎、『幼児の教育』(1968) P81~82
- (55) 同上 P46

北星学園大学文学部 北星論集第27号正誤表

頁・行	誤	正
172頁 17行目	中村と齊藤 (1987) という。	という(中村と齊藤,1987)。
173頁 11行目	中村と齊藤 (1987) とされる。	とされる(中村と齊藤, 1987)。
175頁 1行目	程度と保母並行	程度とほほ並行
184頁 1行目	(末瀬と渡部,1987)	(松瀬と渡辺,1987)
185頁 4行目	(河添,1980)	(河添,1976)
216頁 7行目	Hackel	Heckel
225頁下から 9行目	保育時宣	保育時間
242頁 13行目	Labonrs	Labours
256頁 18行目	Pevelopment	Development